

- 今日のテーマ

「太郎はなぜ「明日の神話」を描いたのか。」

- 簡単にお名前と地域など教えてください。

- 岡本太郎について何か知りたいことありましたらお聞かせください。

明日の神話・発見から移送・修復工事・展示公開までの経緯(2003~2008)

①

壁画の発見
メキシコシティ
2003年

・9月メキシコシティで岡本敏子が確認する。

②

修復家
吉村絵美留が
現地調査
2004年

・4月修復家・吉村絵美留が現地にて壁画の状態を調査
・10月芸術振興財団が再生プロジェクト事務局発足
・壁画移送・修復に向け本格始動する。

③

所有権移転
壁画解体
日本移送
2005年

・所有権移転の契約締結
・壁画解体・梱包移送準備完了
・4月岡本敏子急逝
・神戸港に到着
・愛媛県東温市の作業場に壁画搬入
・バラバラな壁画を接合作業

④

修復作業の
特別公開
2006年

・地元市民を対象に修復作業の特別公開
・欠損部下塗り作業
・作業場から東京汐留へ移送
・除幕式
・東京テレビで一般公開が開始

⑤

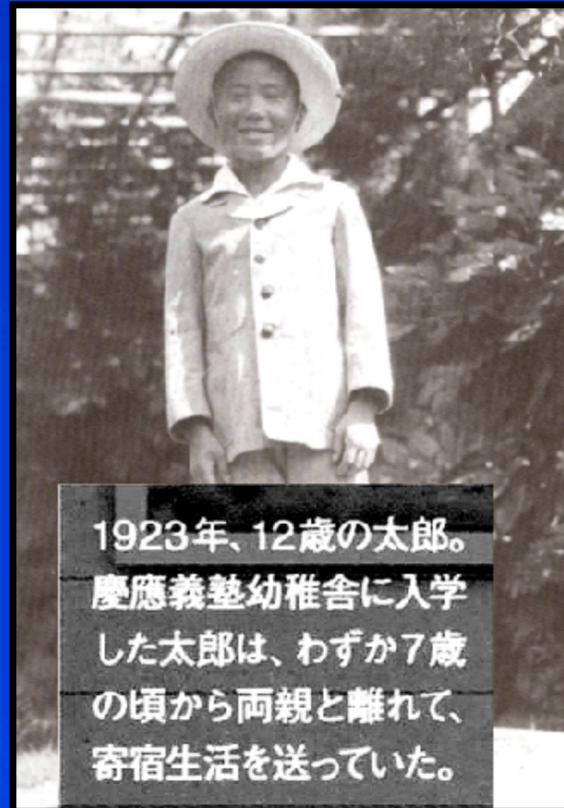
2007年
東京都現代美術館
特別公開
2008年
渋谷駅

・2011一年間にわたる生誕100年事業開始
・TARO100年際開催
・nhkドキュメンタリー「太郎と敏子」の放映
・表参道ヒルズにて映像祭「ROLL OVER TARO!」開催

①-1(1911・0歳~1945年・34歳)誕生~パリ時代



《敗惨の嘆き》1925年



1923年、12歳の太郎。
慶應義塾幼稚舎に入学した太郎は、わずか7歳の頃から両親と離れて、寄宿生活を送っていた。



1925年、東京・青山南町の自宅にて。右から父・一平、太郎、母・かの子。一平は大正末期から昭和初期にかけて一世を風靡した人気漫画家、かの子は若くして評価された歌人であった。この年、13歳の太郎は処女作《敗惨の嘆き》を制作した。

○ **《敗惨の嘆き》1925年**・・・慶應義塾幼稚舎中等科普通部に所属していた13歳のときの作品。同校商工部との対抗ポートルースに普通部が負けたことを産材としている。水彩で彩色された画面の中に、慶應義塾の学帽や徽章、そして種目名の「カッタ」という文字坑抽象的な画面構成で象徴的に配置されている。同級生で後に小説家となる野口富士男らを中心とする同人誌の表紙に使われた作品である。

岡本家の人々1

特集 2

岡本家の 人びと

岡本太郎は、書家の祖父、人気漫画家の父、作家の母という、芸術一家のDNAを受け継ぎ、その感性を爆発させた。
太郎の芸術センスは、岡本家という特殊かつ恵まれた環境で育まれ、みごとな花を咲かせたのである。



1889~1939

作家

太郎の母。神奈川県横浜市高津村二子（現・川崎市高津区）に300年続く旧家大買家の長女として生まれる。16歳頃から与謝野晶子の『明星』などに短歌を発表し始め、早熟な才能を発揮。夫・一平は、かの子の才能を見抜き、文壇デビューのために全面的に妻を支えた。1911年に太郎を産んだ後、1913年には長女を、1915年には次男を出産するが二人とも間もなく死去する。いわゆる良妻賢母ではなかったものの、太郎に画家になることを薦めるなど、芸術家岡本太郎に及ぼした影響は多大だった。



岡本かの子

「二平氏のかの子氏を聖観音とも見たが、そうするとこの一家は聖家族でもあろうか。あるいはそうであらうと私は思っている。」
——川端康成の序『母の手紙』(婦女界社)

岡本太郎

1911~1996



岡本敏子



1926~2005

養女

旧姓平野敏子。太郎の養女。公私にわたるパートナーとして50年近く太郎を支え続けた。

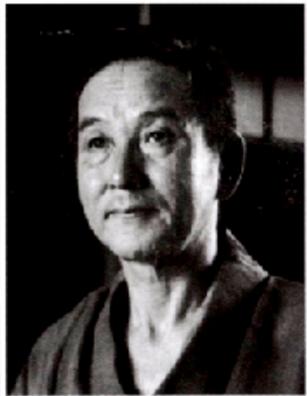


岡本かの子著
岡本太郎装幀
《生々流転》1940年2月
表紙には太郎の《夜》(p29)の、内扉には《傷ましき鏡》(p20)のモチーフが使われた。



岡本かの子著
岡本太郎装幀
《老妓抄》
1939年3月 装幀1985年

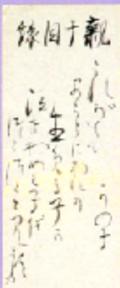
岡本一平



1886~1948

漫画家

太郎の父。東京美術学校（現・東京藝術大学）出身。大正から昭和にかけて一世を風靡した漫画家で、「宰相の名前は知らなくても岡本一平の名を知らぬものはない」とまでいわれた。1910年24歳で大買かの子と結婚。かの子の死の2年後の1941年に再婚し、一男二女をもうけた。



これがそも まことにわれの 生める子か
泣きわめく子をつくづくと見る



岡本一平画
岡本かの子書・歌
《親子目録》
1925年 紙本彩色
川崎市岡本太郎美術館

私が今考えて父母に感謝することがあるとすれば、父も、母も、世間一般の親としてはまったく落第だったが、常に対等な友人のように、人間同士として扱ってくれたことである。
——二平かの子心（生きる凄惨い父母）(チクマ秀版社)

一平の父、太郎の祖父。本名は竹次郎。伊勢・藤堂藩に仕えた儒者・岡本保五郎の次男として生まれた。書家であると同時に版下作りの名手といわれ、明治期の女性のための教育書『女寶』を編纂するなど活躍した。



岡本一平画
岡本かの子書・歌
《かの子観音》
制作年不詳 紙本彩色
川崎市岡本太郎美術館



岡本一平 《今日日曜也》
(['雅俗帖']より)
川崎市市民ミュージアム

岡本可亭

岡本可亭《七言絶句》
制作年不詳
大東文化大学中林研究室
(川崎市岡本太郎美術館寄託)

陶芸家 1883~1959

本名は房次郎。京都洛北・上賀茂神社の社家の次男として生まれるが、生後間もなく里子に出された。1904年、21歳で日本美術展覧会の書の部に出品し、一等賞二席に入賞。翌年岡本可亭の内弟子となり、2年間、可亭のもとで版下書きなどを手伝う。歳に近い一平との交流は可亭方を辞した後も続き、後には太郎とも親交を結ぶ。1955年、太郎が催した「実験茶会」にも客として招かれた。

北大路魯山人

池部 鈞

1886~1969

画家

クワウ

1897生まれ

可亭の三女。
一平の末妹。

池部 良

1918~2010

俳優

如首如天如...
殿到明天...
一陽...
手...
...

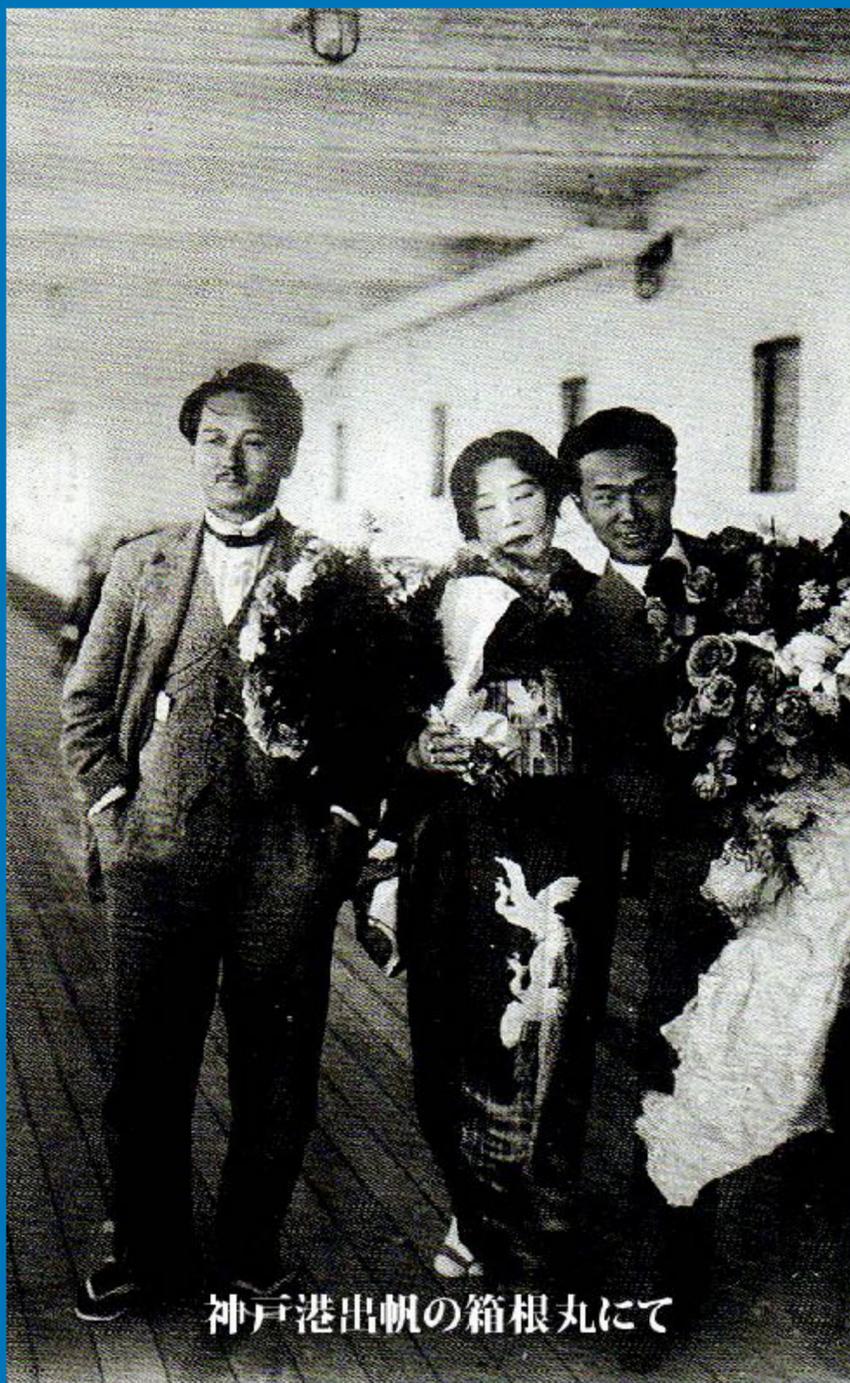
岡本一平が朝日新聞の特派員として会議の取材に行くことになり、息子の岡本太郎も東京美術学校を休学し渡欧、一平が帰国後も太郎だけは約10年間でパリで過ごした。

(1911・0歳~1945年・34歳)誕生~パリ時代

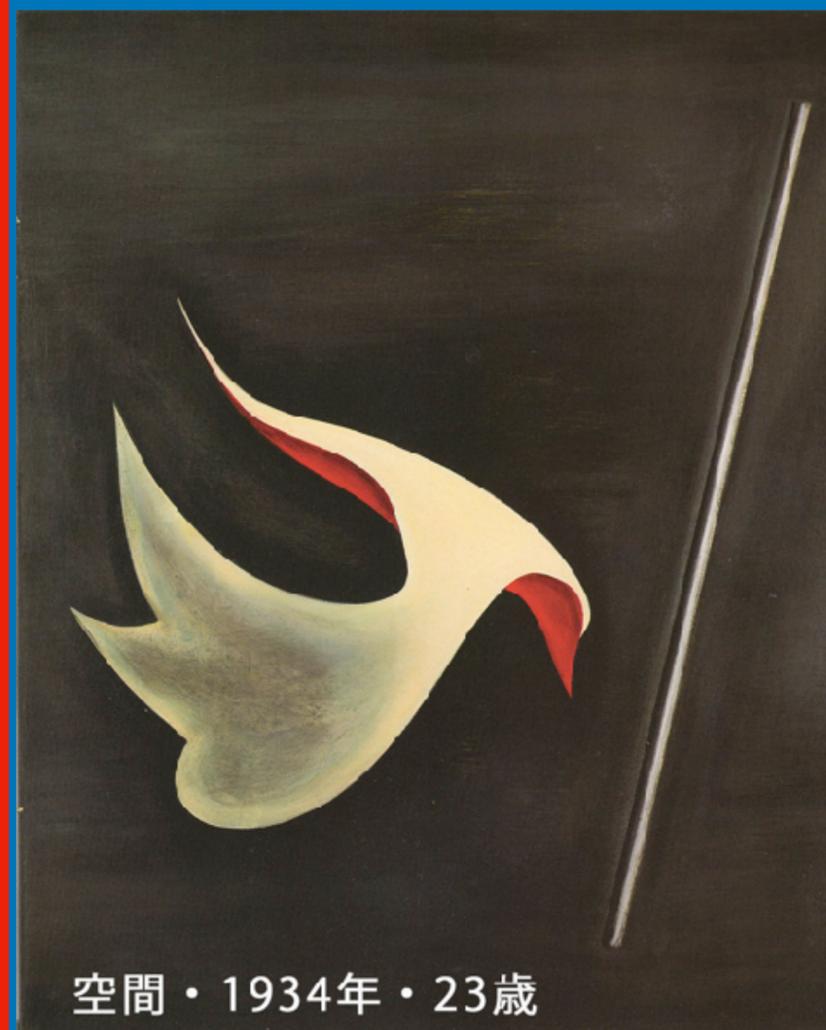
○東京美術学校に入学した1929年の12月、太郎は父・一平の**ロンドン軍縮会議の取材旅行**に母・かの子とともに同行し、翌年の1月13日、パリに到着した。ロンドンに向かう両親と別れ、19歳の太郎は**单身パリに残り**、その後、約10年間、同地で過ごすこととなった。一平とかの子は、帰国前にパリを再訪し、1932年1月、パリ北駅で太郎に見送られている。**これが太郎にとって母との今生の別れとなった。**その7年後、パリの太郎は、かの子の急逝の衝撃の電報を、受け取ることになるのである。

「僕はパリで、人間全体として生きることを学んだ。画家とか彫刻家とか一つの職業に限定されないで、もつと広く人間、全存在として生きる。」
(壁を破る言葉)

○《空間》1934/1954年・・・赤い裏地を見せて浮遊する1枚の白い布と1本の金属の棒を、平面的でもあり立体的でもある対象として提示した作品。薄めた絵の具を塗り重ねた灰色の背景には深さが醸成され、平面と立体を包摂する空間となっている。布は岡本太郎がパリ時代に取り組んだ重要なモチーフであり、その後の作品にもたびたび確認できる。



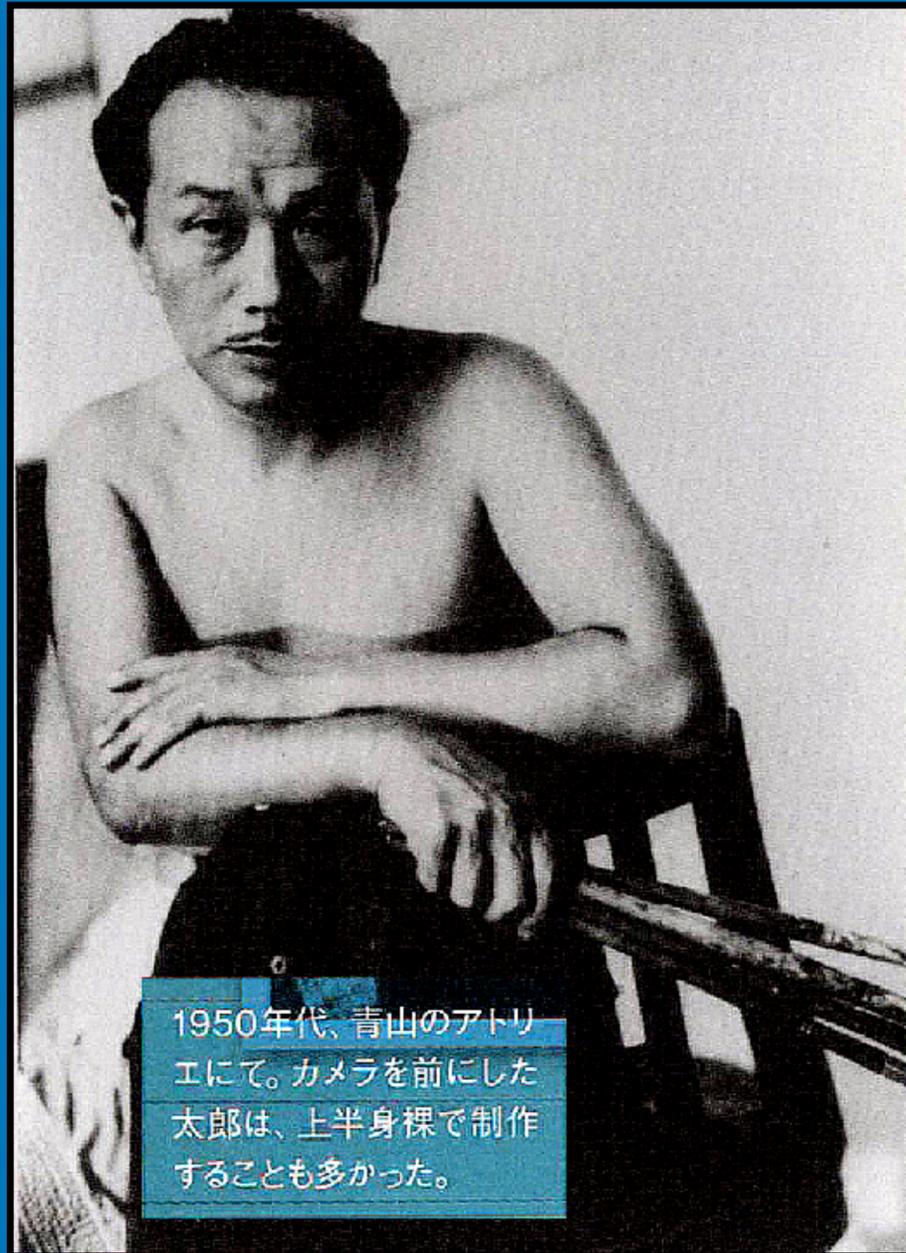
神戸港出帆の箱根丸にて



空間・1934年・23歳

②-1(1946・35歳~1959年・48歳)・前衛芸術家としての闘い

芸術家は一瞬も立ち止まることなく、過去の所産を常に否定して前進しなければなりません(現代芸術入門・河出書房)



1950年代、青山のアトリエにて。カメラを前にした太郎は、上半身裸で制作することも多かった。

1950年、二科展の前夜祭にて。1946年に復員した太郎は、その翌年、二科会員となり、若手芸術家の中心に立って、会の革新に努めた。



岡本太郎39歳

二科展1950年・39歳

○1946年6月岡本太郎は中国で捕虜生活の後に復員した。東京・青山の自宅は、**1945年3月の東京大空襲**のために、パリ時代に制作した作資や資料もろとも焼失おり、**灰燼と化していた**。岡本は、1947年1月に美術団体の二科会員に推挙され、本格的に創作活動を再開した。日本で待っていたのは、**旧態依然とした芸術界**であった。岡本はその変革を目指して1948年、**花田清輝や安部公房**らと「夜の会を結成」する。同年秋には「**アヴァンギャルド芸術研究会**」も発足する。

②-2(1946・35歳~1959年・48歳)・前衛芸術家としての闘い

1948年岡本太郎と
平野敏子・上野毛アトリエ



1948年に岡本太郎と出会った平野敏子は、岡本の仕事を手伝うようになり、やがて公私にわたるパートナーとなる。写真は、岡本が青山に移るまで暮らした上野毛のアトリエ。

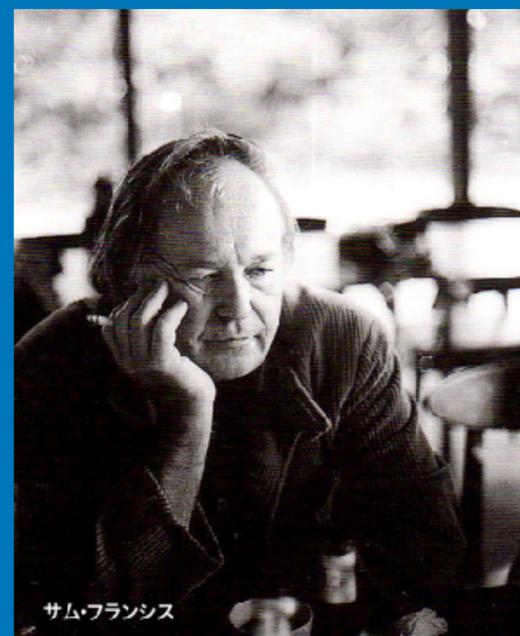


岡本太郎

1953年1月から2月にかけて、パリのクルーズ画廊で開かれた個展のオープニングにて。バタイユやザッキン、ミショー、ソニア・ドロネらが来訪した。

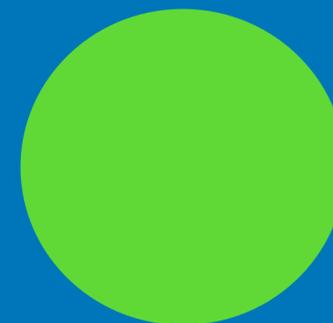
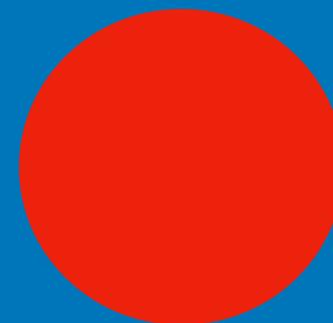
ミシェル・タピエ

Le grand Œil
de Michel Tapié

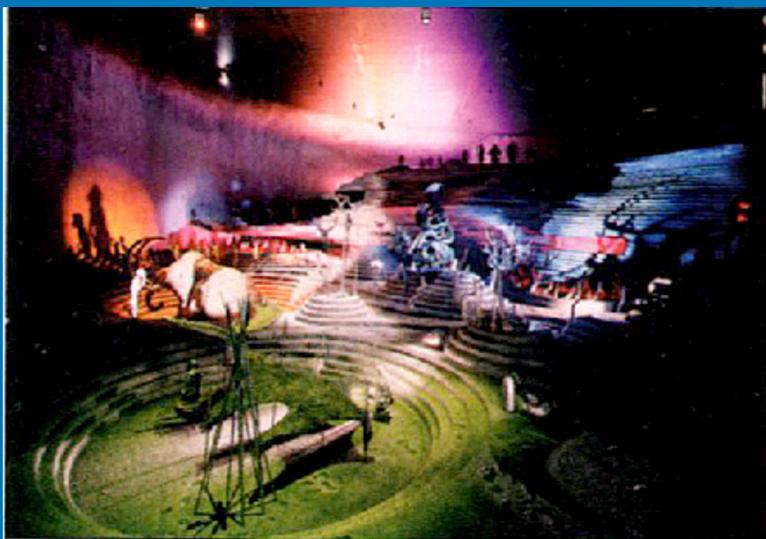


サム・フランシス

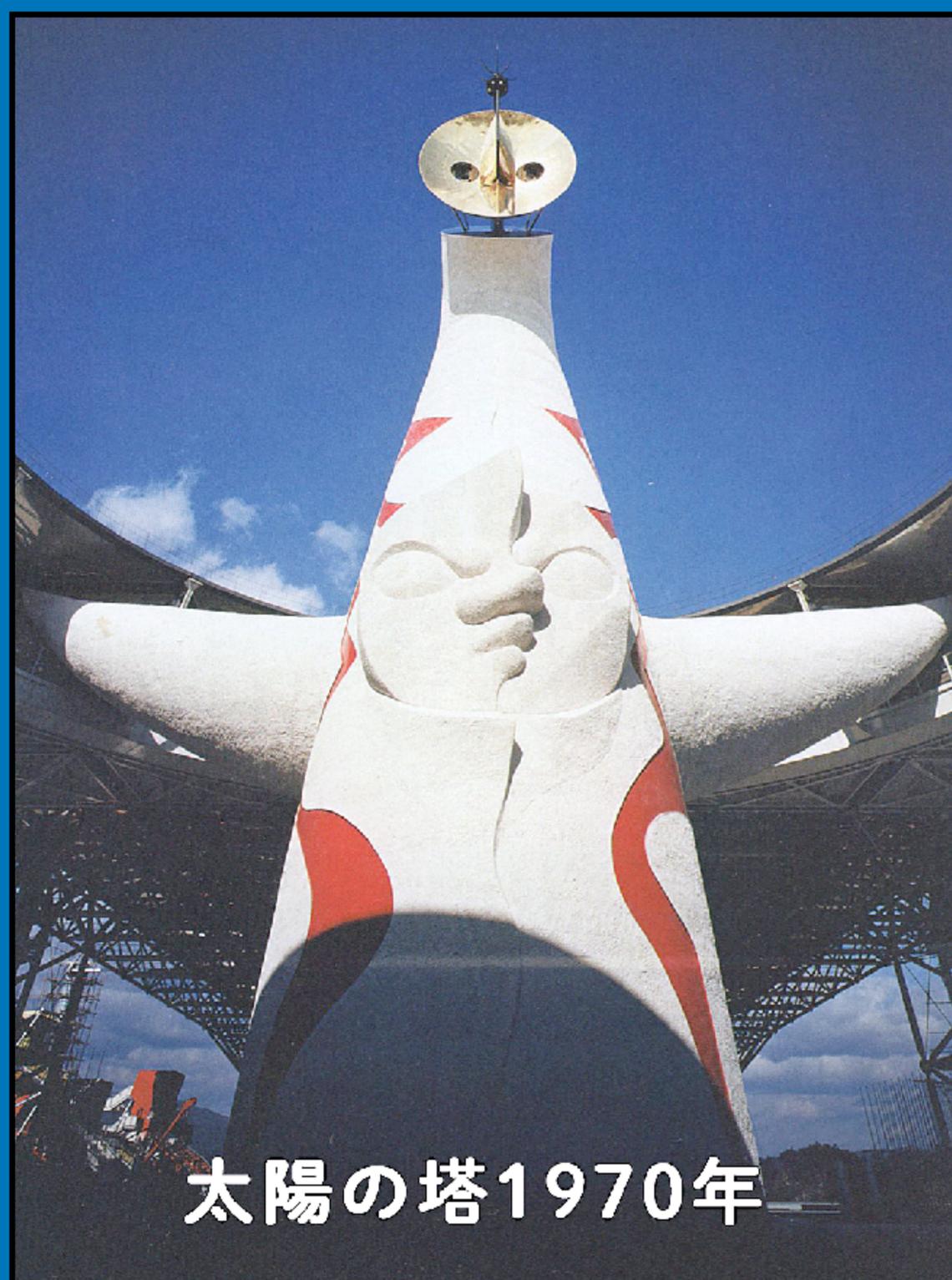
○ 1952年の暮れから翌年にかけて岡本は戦後最初の渡仏をし、アトラン、ブルトンらの旧友と再会している。この渡仏で、岡本は、パリの芸術界の変化にいち早く接触する機会に恵まれた。評論家の**ミッシェルタピエ**を訪問し、**サム・フランシス**らの作品を見ている。また、渡仏・ヴァロリスで**ピカソ**との面談を果たしている。



③-1(1967・56歳~1970年・59歳)・太陽の塔



《太陽の塔》は、大阪万博のテーマ館としての役割を担っていた。内部も見学することが可能で、生物進化の過程を再現した高さ50mの《生命の樹》(右)が塔内を貫いていた。空間を構成する「地下・過去の世界」「地上・現代の世界」「空中・未来の世界」というテーマには、岡本独自の芸術思想が反映されている。



太陽の塔1970年

大屋根を突き破る
異様な物体

丹下健三設計の大屋根を突き破るように屹立する《太陽の塔》。訪れた人びとは、まずこの巨大で異様な物体に目を奪われた。



不可思議な
《太陽の塔》の内部



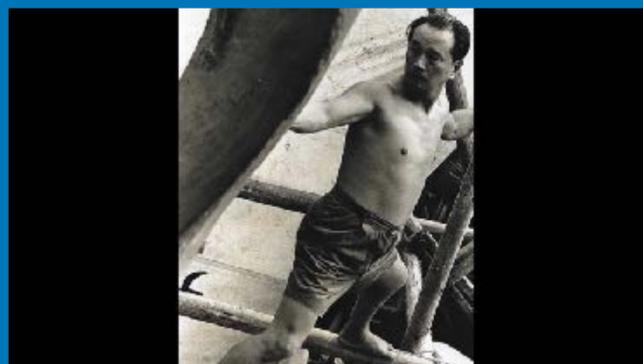
背中に顔を見せる「黒い太陽」

《太陽の塔》の背中には《黒い太陽》がタイルにより表わされていた。これは《太陽の塔》の後ろ側にあたる「お祭り広場」を担当した建築家・磯崎新らのチームからの「お祭り広場にも象徴的なものを」という要請を受けて、追加されたものだった。





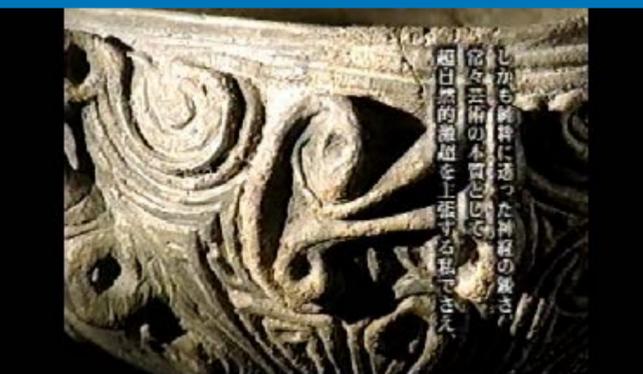
自分自身をいぶつかるように
精神状況になる



1982年7月
当時71歳

岡本太郎の知られざる人生
"実なおじさん"の素顔

岡本太郎



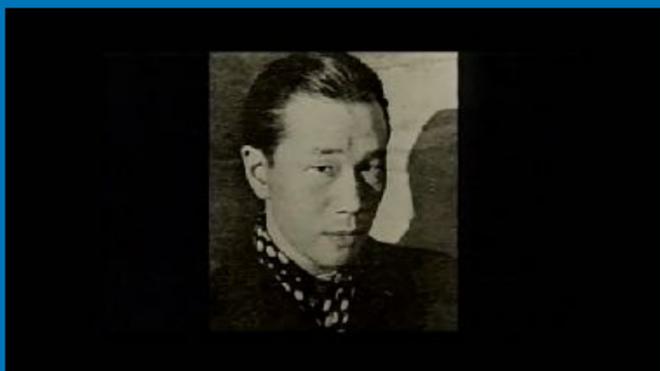
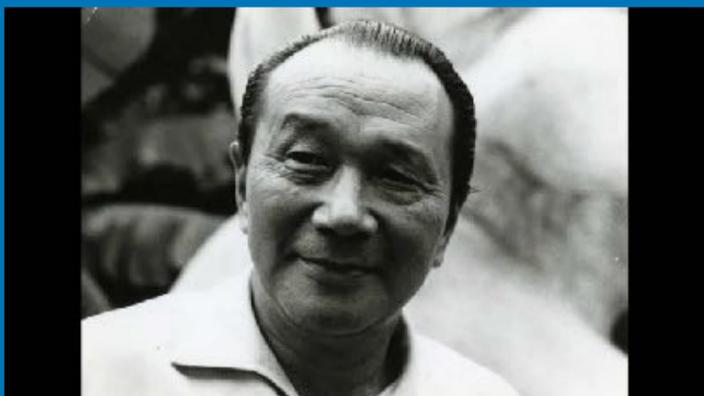
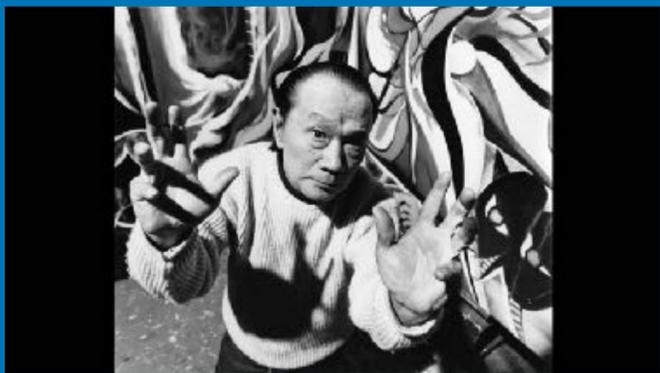
しかも銅像に透った神様の奥さ
宮々三州の小賢じり
超自然現象を主張する野でさん

太陽の塔と明日の神話 の双生児的關係

誕生

1967年夏、岡本太郎56歳。メキシコにおける巨大壁画の制作を決意、間もなくして下絵4枚を次々と描き上げていった。日本万国博覧会の開催をひかえ、『太陽の塔』を含む、テーマ館の制作準備に多忙を極めていた頃のことだ。

1968年春。太郎は壁画制作のためにメキシコ入りし、それはマスコミにも取り上げられている。秘書として現場に立ち会っていた敏子は、制作時の様子を細かに記録していた。「明日の神話」はいかにして「誕生」したのか――。



「明日の神話」 誕生秘話 岡本敏子



○ 2005年4月。『明日の神話』がメキシコで梱包され、日本へ移送する手はずが整ったという知らせを聞いて間もなく、**岡本敏子は急逝した**。誰よりも、その到着を日本で待ち焦がれていたはずなのに。だが、「メキシコを出発さえすれば大丈夫。あとはみんなでやってちょうだい」と、安心して旅立ったのかもしれない。それから約5カ月が過ぎたある日、敏子の書斎から、『明日の神話』の制作時について綴った未発表原稿が見つかった。2004年春頃に書かれたと思われるその原稿は、**メキシコで壁画を描いていた太郎の姿が克明に描写された**、まさに『明日の神話』誕生の**貴重な記録であった**。当時の太郎の圧倒的なエネルギーを人々に伝えることこそが、**本当に最後の、彼女の仕事**であったのかもしれない

太郎「明日の神話」を語る!



○ 太郎の仕掛けとは 岡本太郎が『明日の神話』の主題として「爆心地」を真正面から見据えていたことは、随所で『燃える人』と共通するモチーフからしてもあきらかだ。ただし、もしもそれを「事後の絵」としてしか描き得ないのだとしたら、『明日の神話』は依然、歴史的には空爆被災の絵のバリエーションの域を出ず、言ってみればひとつの空襲を描いたにすぎないピカソの『ゲルニカ』を超えることはできない。地表で起こった摂氏1万度の純粹光による蒸発と消失には、もう残酷という言葉すら当たらないだろう。この無謀な試みにひとつの可能性を与えてこそ、『明日の神話』は名実ともにピカソを超え、20世紀美術に対する、いや表象を旨とする美術そのものに対する幕引きをすることができるはずだ。

①-1(1967・56歳~1970年・59歳)・明日の神話(発見から修復へ)

明日の神話1968年57歳



○ 2003年秋、長らく行方がわからなくなっていた岡本太郎作の巨大壁画『明日の神話』がメキシコシティ郊外で発見されました。描かれているのは原爆が炸裂する悲劇の瞬間です。しかしこの作品は単なる被害者の絵ではありません。人は残酷な惨劇さえも誇らかに乗り越えることができる、そしてその先にこそ『明日の神話』が生まれるのだ、という岡本太郎の強いメッセージが込められているのです。『太陽の塔』と同時期に制作され、“塔と対をなす”といわれるこの作品は、岡本太郎の最高傑作のひとつであり、岡本芸術の系譜のなかでも欠くべからざる極めて重要な作品です。

○ 残念なことに、長年にわたって劣悪な環境に放置されていたため、作品は大きなダメージを負っていました。そこで、当財団は、この作品を日本に移送し、修復した後に広く一般に公開する『明日の神話』再生プロジェクトを立ち上げました。2006年6月には修復が完了、同年7月に汐留にて初めて行われた一般公開では、50日間という短期間の中で述べ200万人の入場者が集まりました。後、作品は東京都現代美術館にて2007年4月から2008年6月まで公開され、2008年3月に渋谷に恒久設置することが決定、11月18日より渋谷マークシティ一連絡通路内にて公開が始まりました。

①-2(1967・56歳~1969年・58歳)・明日の神話

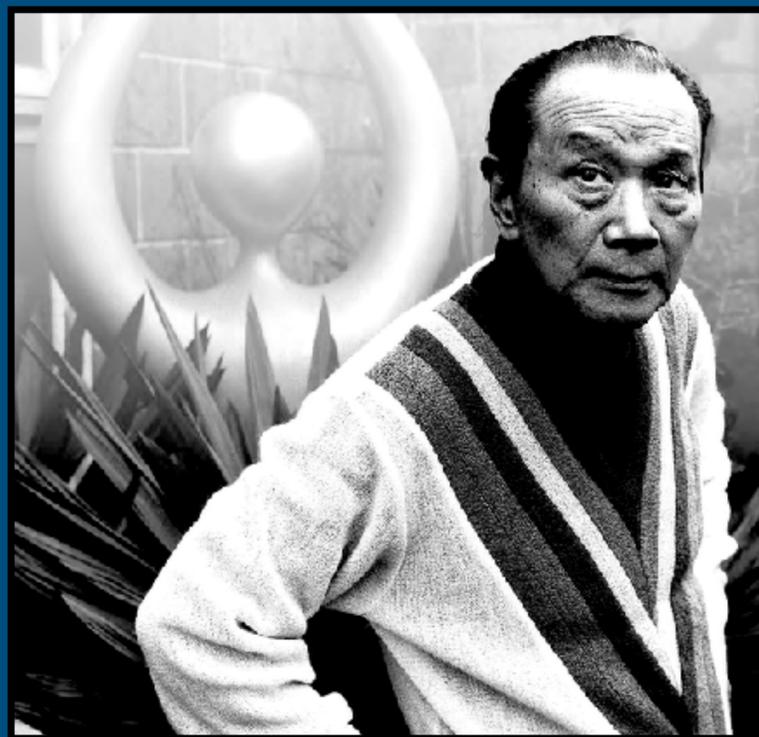


○「反核」というメッセージ・・・画面右下に擬人的に描かれているのが**第五福竜丸**。岡本は《**燃える人**》以降、《瞬間》(1955年)、《**死の灰**》(1956年)など、たびたび「核」を主題とする作品を描き、自ら戦後の広島を取材するなど、芸術家として「反核」のメッセージを発信し続けた。



○「**明日の神話**」**苦難を乗り越えて未来へ向かう人類のたくましさを描く大作**・・・2008年、東京・渋谷駅に移設されて、世間の注目を集めた巨大壁画《明日の神話》。ここに掲げたのは、その原画である。実際の壁画は、メキシコシティに新設されるはずだった超高層ホテル「オテル・デ・メヒコ」のロビーを飾る予定であったが、同ホテルが開業前の1970年頃に倒産して以降、“幻の作品”となっていた。ところが2003年9月、メキシコ市近郊の資材置場で野晒し同然の状態で見つかり、2005年春、「《明日の神話》再生プロジェクト」によって日本に持ち帰られて修復作業が行われたのである。

①-3(2003年・メキシコにて明日の神話を発見)



■岡本敏子の命を受けて

「『明日の神話』再生プロジェクト」を立ち上げ、成功へと導いた平野暁臣(ひらのあきおみ)。この前代未聞の大事業に、彼とその仲間たちは、どうやって立ち向かったのだろうか。これは、「神話」を延らせた人々の、「真実」の記録である。

○2003年秋、長らく行方がわからなくなっていた岡本太郎作の巨大壁画『明日の神話』がメキシコシティ郊外で発見されました。描かれているのは原爆が炸裂する悲劇の瞬間です。しかしこの作品は単なる被害者の絵ではありません。人は残酷な惨劇さえも誇らかに乗り越えることができる、そしてその先にこそ『明日の神話』が生まれるのだ、という岡本太郎の強いメッセージが込められているのです。『太陽の塔』と同時期に制作され、“塔と対をなす”といわれるこの作品は、岡本太郎の最高傑作のひとつであり、岡本芸術の系譜のなかでも欠くべからざる極めて重要な作品です。しかし、残念なことに、長年にわたって劣悪な環境に放置されていたため、作品は大きなダメージを負っていました。

そこで、当財団は、この作品を日本に移送し、修復した後に広く一般に公開する『明日の神話』再生プロジェクトを立ち上げました。2006年6月には修復が完了、同年7月に汐留にて初めて行われた一般公開では、50日間という短期間の中で述べ200万人の入場者が集まりました。後、作品は東京都現代美術館にて2007年4月から2008年6月まで公開され、2008年3月に渋谷に恒久設置することが決定、11月18日より渋谷マークシティ一連絡通路内にて公開が始まりました。

②-1・1968年(57歳)太郎・メキシコへ行く



下/太郎はメキシコシティのホテル建設現場の下見から戻ってすぐ、最初の下絵を描き始めた。3日で仕上がったとされる。左/その後間もなくして描かれた、もうひと回り大きい下絵。後ろの壁には、最初の下絵と、ラフスケッチが見える。



メキシコ入りの太郎と敏子

○ 9月初旬から2週間あまり、メキシコに飛んで壁画を描いていた。幅32メートル、高さ6メートル。プラスチック系の絵の具を使っているので乾きは早く、仕事は進むのだが、とにかく大きい。朝から暗くなるまで昼食ぬきで、助手たちがあきれほど働きづめに働いて、やっとどうにかひと通り手をつけたという程度。がっかりするほど巨大だ。こんなに猛烈に絵を描きつづけたのは、生まれてはじめてだ。

○ 太郎さんはメキシコが大好きだ。行くこと自体が楽しいのだ。それに空港に着くと、タラップの下まで、スワレス氏をはじめ建築家連中、せいぞろその他スタッフが勢揃いしてお出迎え。しかもぞろりと多勢のマリアッチを引き連れてきて、大合奏が始まる。何様のお成りかというようなお祭り騒ぎで迎えてくれる。入国手続きも税関も、特別扱いの一番先で、フリーパス。国賓待遇なのだ。気分よくメキシコの地に足を踏み入れる。

②-2・1967年(56歳)■メキシコの実業家から建設中のホテルの壁画制作を依頼



1968年2月、初めてメキシコに持ち込まれた下絵を見て、スワレス氏は非常に感動したという。昼頃に絵が披露されたが、彼はそこから離れられなくなり、とうとうこの下絵の前でひと晩過ごしてしまったと、敏子は記録している。

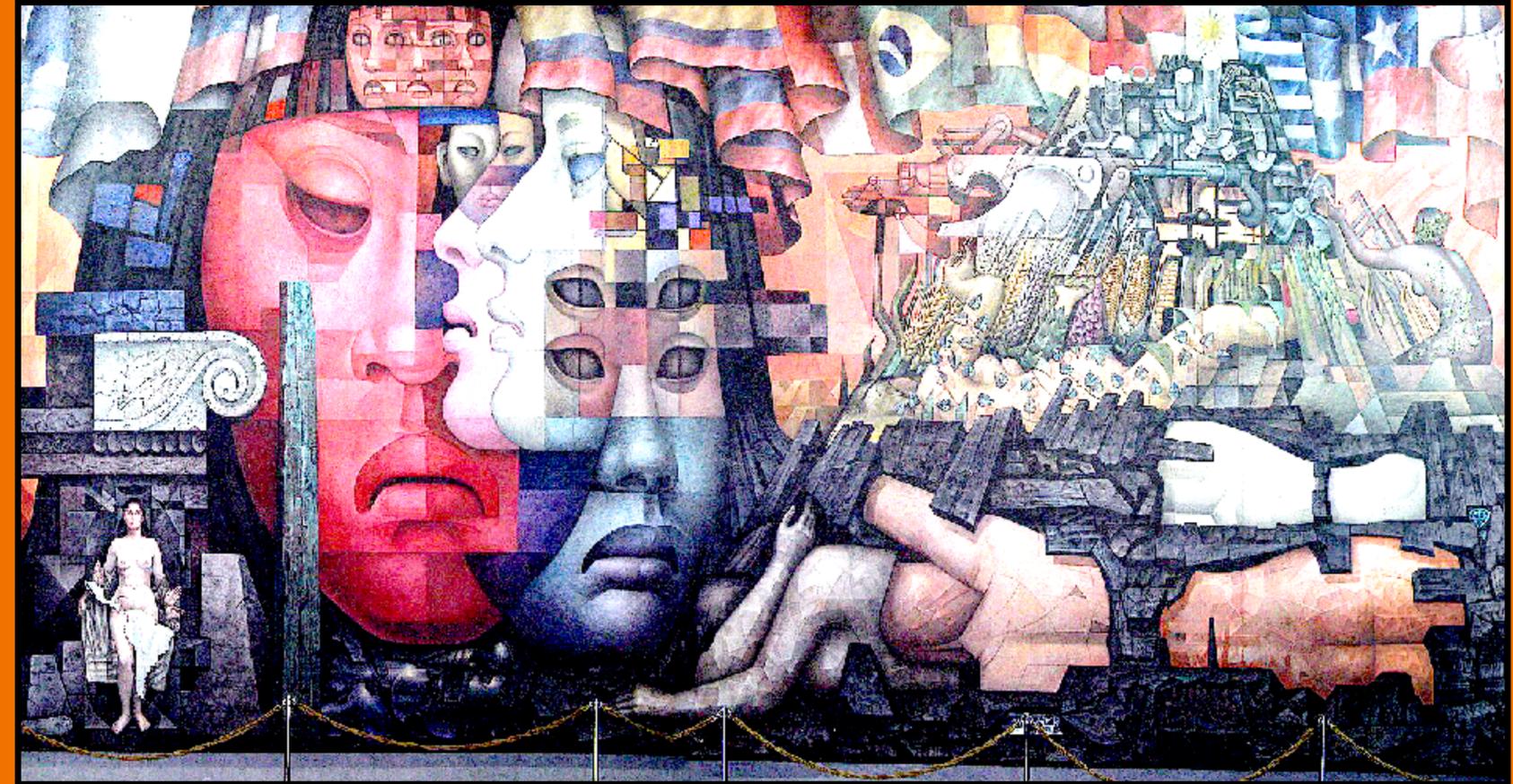


1968年
(57歳)
■メキシ
コに大壁
画を描く



壁画の3分の1、幅10メートルの下絵。国際ビル9階の空きフロアーが、アトリエとして提供された。

②-3・(1967・56歳~1969年・58歳)・メキシコの壁画に影響される



○ここで絵を描き、人々の反応にふれると、**西欧的な美学や価値基準でない**、まったく別な美、生きがいを見ながら求めていることを直観する。メキシコはそれを世界に向かって突き出すべきだ。この土地で、生きがいとしてひらく文化、その誇りを。メキシコのように**民衆の生活感が平気でふくらみ、あふれている国**でこそ、世界的スケールの芸術が生きるべきだ。メキシコのように民衆の生活感が平気でふくらみ、あふれている国でこそ、世界的スケールの芸術が生きるべきだ。私の言動のベラボーさに、彼らはびっくりし、それからひどく嬉しくなってくるらしい。「あなたは**メキシコ人の中のメキシコ人だ、メキシコのサムライ**。チャロだ」と言われる。いまの壁画を頼んでいるスユワレスは国籍を移しメキシコ人になるように真剣にすすめる。いま**シケイロス**のために建てているのと同じくらいの巨大な美術館を作るからなどと。

②-4(1967・56歳~1969年・58歳)・メキシコに大壁画を描く



○ ここはアメリカと地つづきだ。アメリカの人、物、流行、すべて入ってくる。若い世代はニューヨークやサンフランシスコそっくりの仕事をしているのもいる。だがそういう風潮にメキシコ人はやはり納得していない。「アメリカ人は金を持っている。だが文化はおれたちの方がはるかに高い」別に力んで言うのではなく、素直にそう思っている人たちなのだから。そしてメキシコのように、マヤ以来の、芸術の神聖な気配を伝統として持っている国では、市民的な芸術の表情ではやはり食い足りないのだ。何か生命の根源に響いてくる、神秘感がなければ。

○ テレビのインタビューで、「**あなたはどういうおつもりで、メキシコで仕事しているのですか**」と聞かれた。私は答えた。「**メキシコこそ、世界芸術の中心地になるべきだから。私はそれに協力するのだ**」と。芸術の中心がなぜロンドン、パリ、ニューヨークでなければならないのか。なるほどそこは世界の政治・経済の中心だ。だが、だからといって芸術のセンターであるべき理由はまったくない。経済力や軍事力に応じて、芸術の番付がきまるなんてことは卑しい。そうであるべきではないというのが私の情熱だ。

④-4(1967・56歳~1969年・58歳)・メキシコに大壁画完成



○ 予告なしに突然訪ねたので、オーナーのスワレスはど
びあがるようにびっくりし、大喜び。「**ともかく貴方の絵
を見る。すばらしいよ。世界の宝だ**」 早速、現場に案内
する。メインロビーの空間は2年前と同じようになら
とひらけているだけだったが、正面の3階をぶちぬいた壁
に、私の『明日の神話』がびっしりとはまっていた。

○ **中央に骸骨が燃えあがっている幅30メートルの巨大な
絵。**まことに不思議な体験だった。私はいわゆる「絵」に感
動することはめったにない。まして、自分の描いたものなん
かに……。あとはホテル完成寸前に来て仕上げと、サイン
をすればよい。それにしても**骸骨が燃えている絵**をよるこぶ
なんて、メキシコくらいのもの。だから、私はこの国が嬉しい。
大好きなのだ。

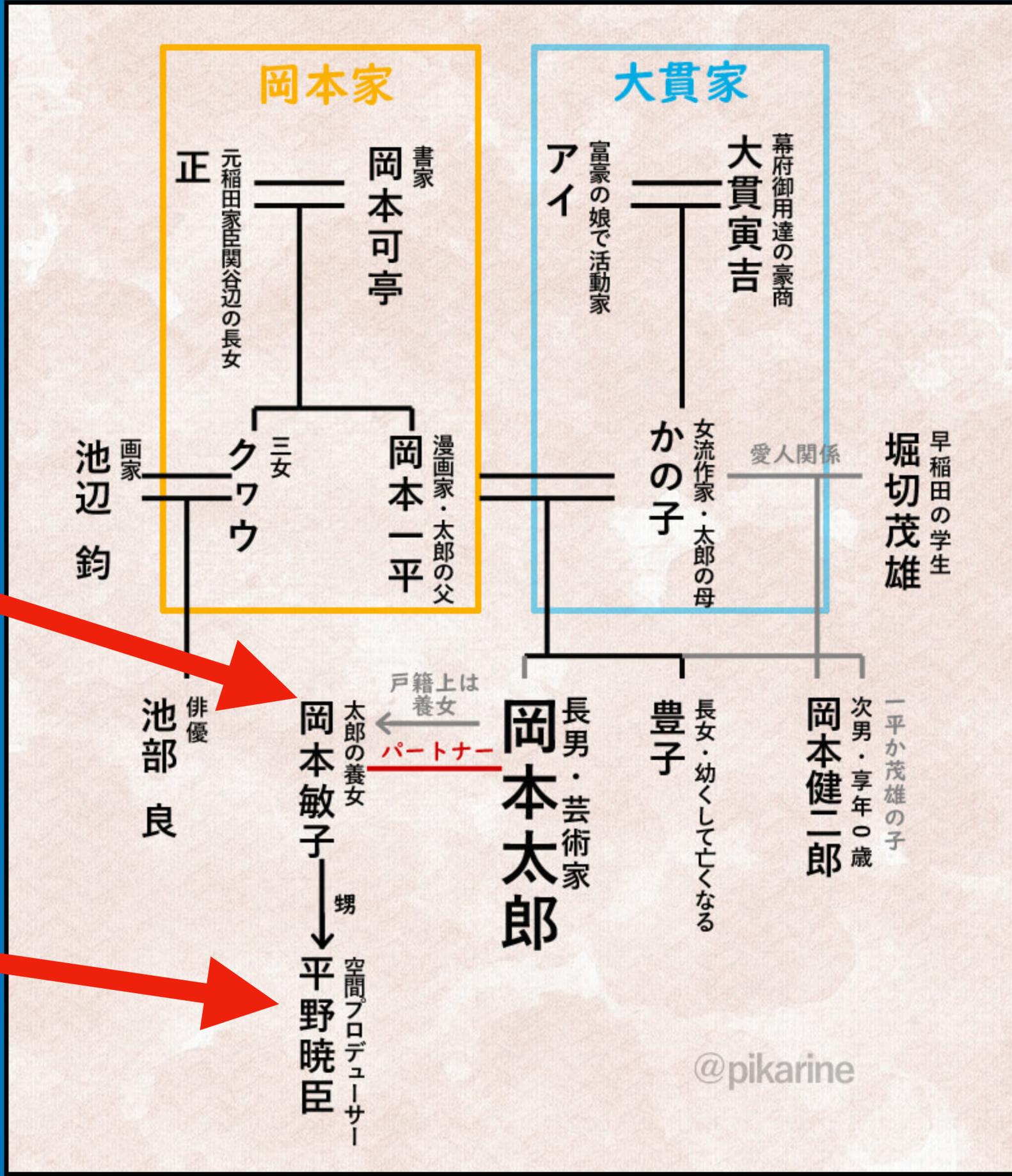
岡本家の人々2



岡本敏子(養女)と太郎



平野暁臣



③-1(2003年・岡本敏子メキシコで明日の神話の発見)



○ 再生プロジェクトゼネラルプロデューサー**平野暁臣**(ひらの・あきおみ)は岡本太郎創設の**現代芸術研究所**を主宰し、イベントやミュージアムなど空間メディアのフィールドで多彩なプロデュース活動を展開。太郎・敏子の型破りな葬儀もともに平野の仕事だった。**2005年6月6日**、六本木ヒルズにおいて、「明日の神話」再生プロジェクト」の初めての記者発表が行われた。中央でマイクに向かっているのが平野暁臣。

○ 岡本太郎の最高傑作よ。敏子はよくそう言っていた。『明日の神話』の所在はおろか、存在しているのかどうかさえわからない状況が続いていた時のことだ。建設中のホテルに『明日の神話』を仮設置したままメキシコを後にしたのが**1969年**。**以来30数年もの長き**にわたって、敏子はこの作品と再会できずにいた。依頼主の経営状況が悪化したことでホテルの建設が頓挫。壁画も取りはずされて各地を転々とするうちに行方がわからなくなっていた。

③-2(2005年)・壁画の修復計画決まる



テレ東
BIZ

岡本太郎氏の壁画修復始まる



○ ここで絵を描き、人々の反応にふれると、**西欧的な美学や価値基準でない**、まったく別な美、生きがいを見なが求めていることを直観する。メキシコはそれを世界に向かって突き出すべきだ。この土地で、生きがいとしてひらく文化、その誇りを。メキシコのように**民衆の生活感が平気でふくらみ、あふれている国**でこそ、世界的スケールの芸術が生きるべきだ。

○. メキシコは2年ぶりだ。以前にはよく来た。**オテル・デ・メヒコ**の壁画を描きに。この絵はまだ未完成だ。というのは、6、7年もたつのにまだホテル自体ができあがらないからだ。いくら**アスタ・マニャーナの国**だといっても、これには驚く。

③-3(2004年)・壁画の修復作業・再生プロジェクト



修復家 吉村絵美留



岡本太郎
明日の神話

修復960日間の記録

『明日の神話』再生プロジェクト タイムテーブル

2003年9月

メキシコシテイ郊外の資材置き場にひっそりと保管されていた壁画を岡本敏子が確認。

2004年4月

修復家・吉村絵美留が、現地にて壁画の状態を調査。

10月

(財)岡本太郎記念現代芸術振興財団内に、再生プロジェクト事務局を発足。壁画の移送・修復に向けた取り組みが本格的に始動する。

2005年3月

所有権移転の契約を締結。

4月

メキシコにて壁画を解体・梱包。日本への移送準備が整う。

岡本敏子急逝。

5月5日

壁画が神戸港に到着する。

6月6日

六本木ヒルズにて、初めてのプレス発表を行う。

7月16日

愛媛県東温市の作業場に壁画を搬入。

8月1日

ガラスの作業台の上にバラバラになった壁画を並べ、接合作業開始。

8月29日

日本テレビ放送網株式会社とメディアパートナーシップ契約を締結。

9月9日

「ほぼ日刊イトイ新聞」のサポートで、

プロジェクトの公式サイトがスタートする。

9月12日

壁画裏面とアクリル板との接合開始。

9月29日

1枚目のパネルを立て起こす。

10月1日

画面修復開始。接合と補強が終わったパネルから順次立て起こし、画面修復

に着手する。

11月30日

すべての立て起こしが完了。ついに全貌を現す。

2006年2月21日

松山市立味酒小学校の6年生に、修復現場で特別授業を行う。

3月25日

地元市民を対象に、修復作業の特別公開を行う。

4月15日

充填作業完了。

4月25日

欠損部下塗り完了。

5月28日

補彩完了。

6月3日

修復作業がすべて完了する。

6月17日

作業場から東京・汐留へ移送。

6月20日

汐留に搬入。

7月7日

除幕式。

7月8日

東京・汐留の日本テレビ・ゼロスタ広場で一般公開が始まる(8月末まで)。

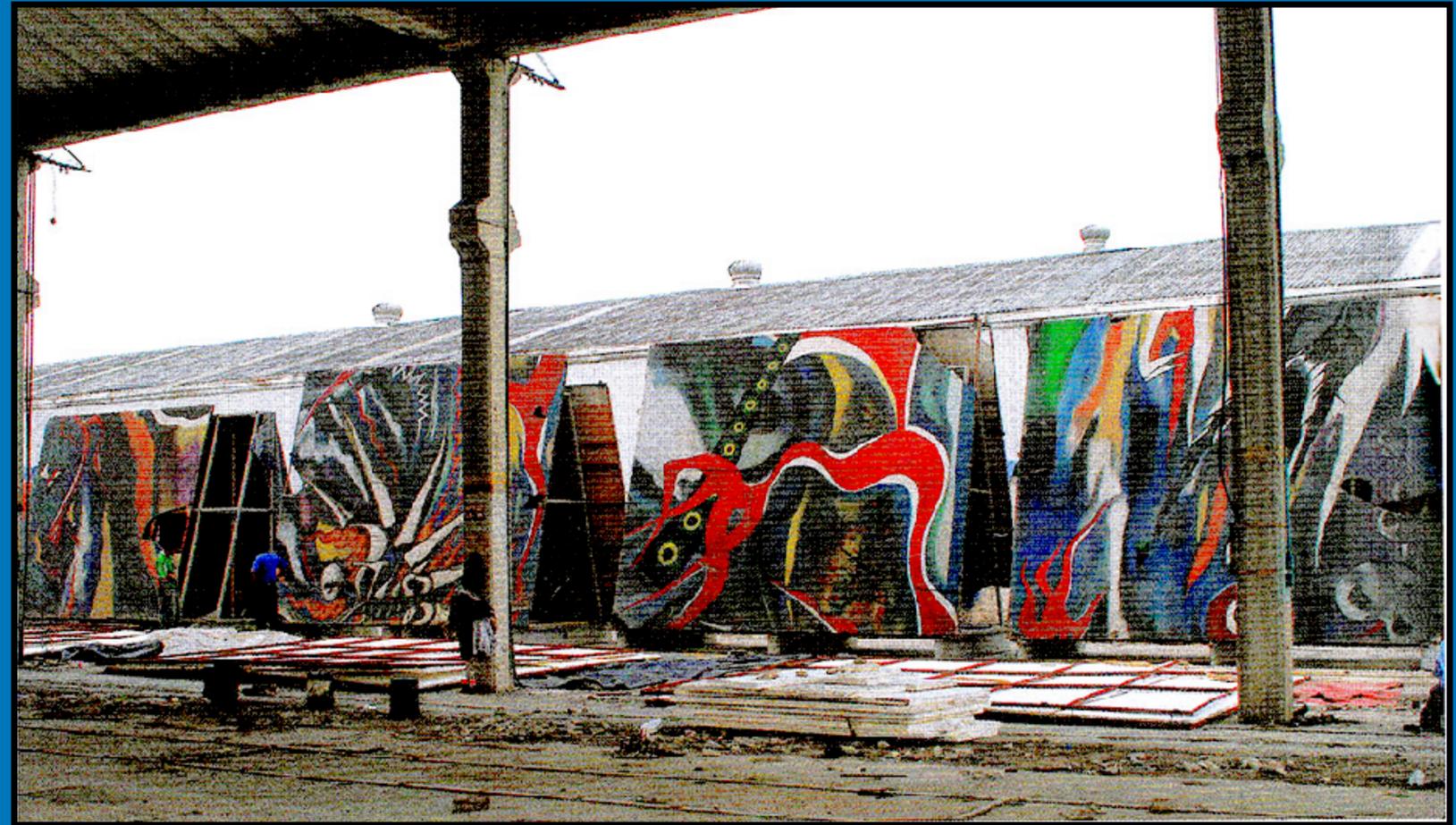
③-3(2003年) 明日の神話の発見(メキシコシティ郊外・資材置き場)



○ 運命の2003年9月、ついに彼女は壁画と対面する。メキシコシティから1時間ほど離れた工業団地。かろうじて屋根だけが残る廃屋の片隅に『明日の神話』は、ひっそりと佇(たず)んでいた。「ああ、ここにいたのね。ずいぶん捜したのよ」

○ 捜し続けていた作品と再会した敏子は、心から感激し、そして安堵した。だが同時に惜然(しゃくぜん)ともしたようだ。長年におたって劣悪な環境に置かれていた『明日の神話』はひどく汚れ、画面全体に無数のヒビ割れが走っていた。反(そ)ってめくれあがったり欠け落ちて無くなったりしている部分も目に入る。このまま放置すればやがて朽ち果ててしまうことは明らかだ。残された時間はわずかしかない状態であった。

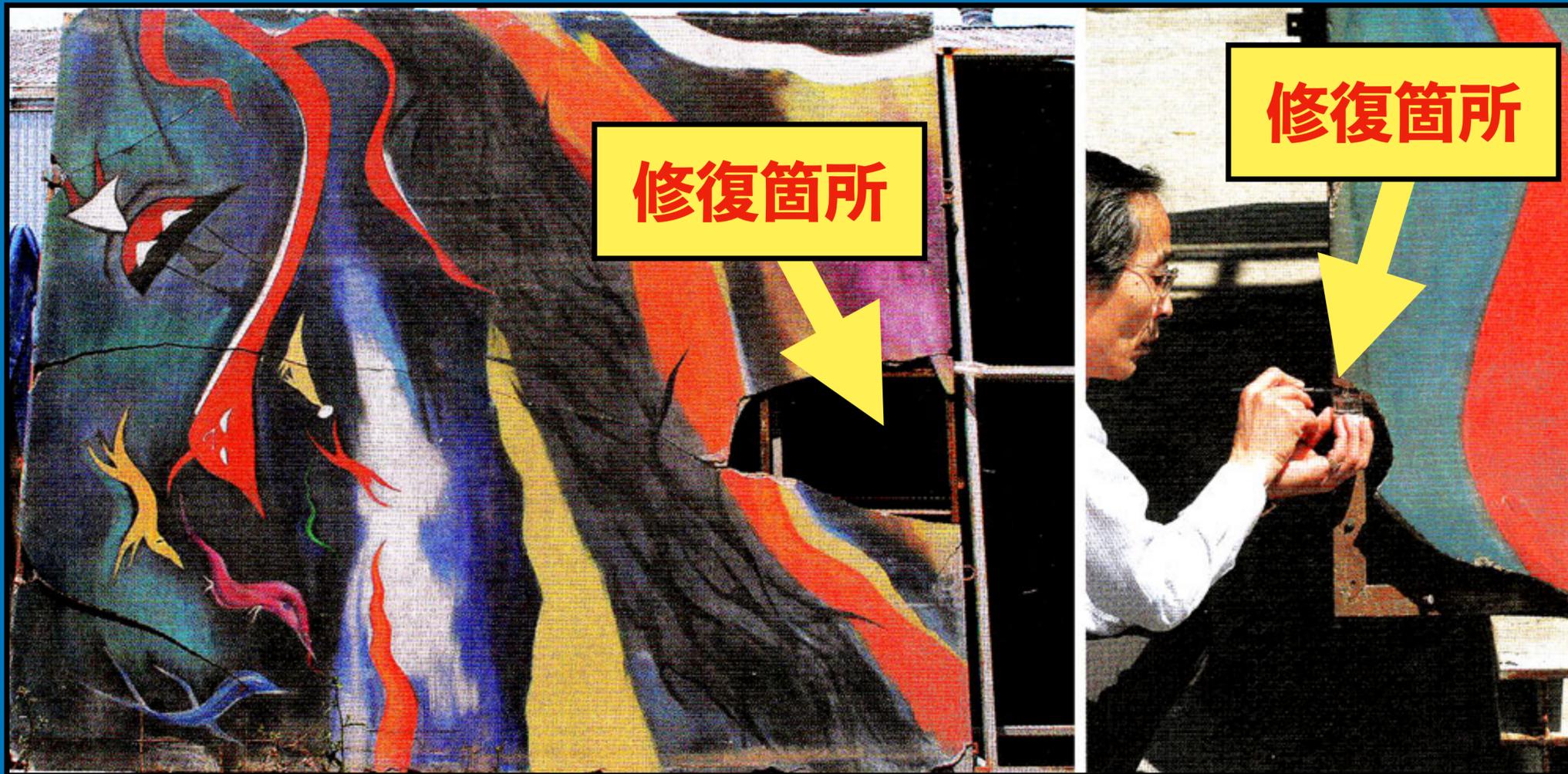
③-4(2004年)・壁画移送と復元の使命(再生プロジェクト始動)



○. **敏子の決意と壁画への思い**・・・捜し続けていた作品と再会した敏子は、心から感激し、そして安堵した。だが同時に惜然(しゃくぜん)ともしたようだ。長年にわたって劣悪な環境に置かれていた『明日の神話』はひどく汚れ、画面全体に無数のヒビ割れが走っていた。反(そ)ってめくれあがったり欠け落ちて無くなったりしている部分も目に入る。このまま放置すればやがて朽ち果ててしまうことは明らかだ。残された時間はわずかしかない。

○. **日本に戻った敏子**・・・岡本太郎の最大・最高の傑作をこのまま見殺しにはできない。「**なんとしても元通りに復元し、多くの人に見せたい。いや、見せねばならない。それが自分の使命だ。**」日本に戻った敏子は、人に会うたびに壁画への思いを語り、協力を求めた。そして僕も「この仕事、あなたがやるのよ」と言われて、いつの間にか**実務の責任者**になっていた。

③-5(2004年4月)現地での壁画修復調査



○どうすれば作品を入手できるのか?・・・仮に入手できたとしてあれほど巨大なものをいったいどうやって運ぶのか～日本まで運べたとしてあんな状態の壁画をどうやって修復するのか? どんな専門家をどのように組み合わせればプロジェクトが成り立つのか? 莫大な費用をどうやって賄えばいいのか?……。なにからなにまで一切が不明で、持ち駒や取引材料がなにひとつない。これでは丸腰で戦場に飛び出すようなものだ。理屈で考えたら手を出せる話ではない。

○だが条件が調うまで待つわけにはいかなかった。作品の傷みは日増しに大きくなっていくし、いつまた姿を消してしまうかわからない。とにかく、すぐに走り出すしかなかった。こうして見込みも勝算もないまま、プロジェクトは船出することになった。もっとも、まず初めにやるべきことだけははっきりしていた。壁画を所有者から人手すること、そして壁画の物理的な特性を調査・解析することである。

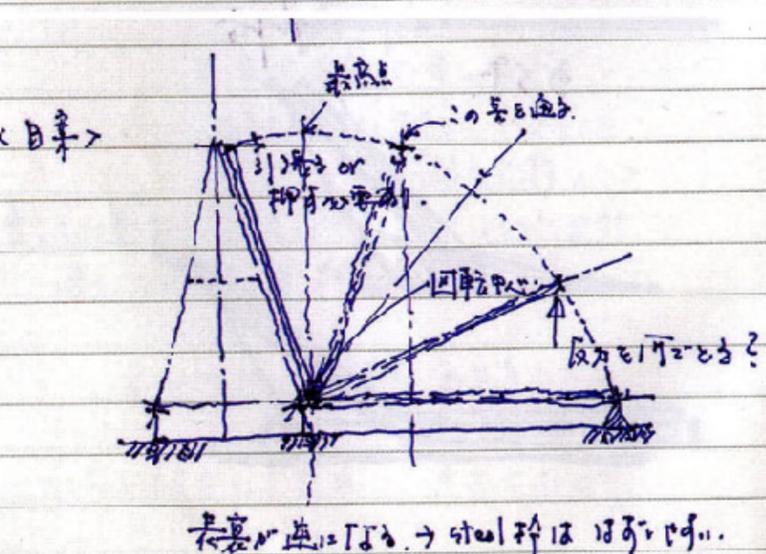
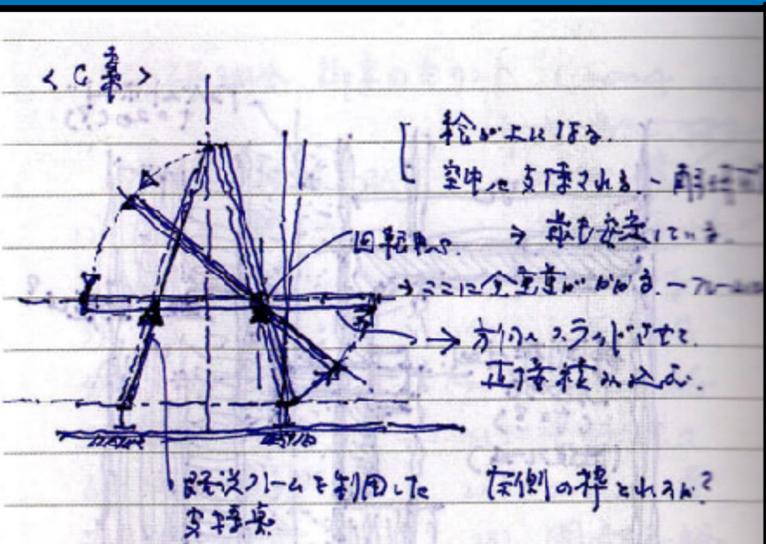
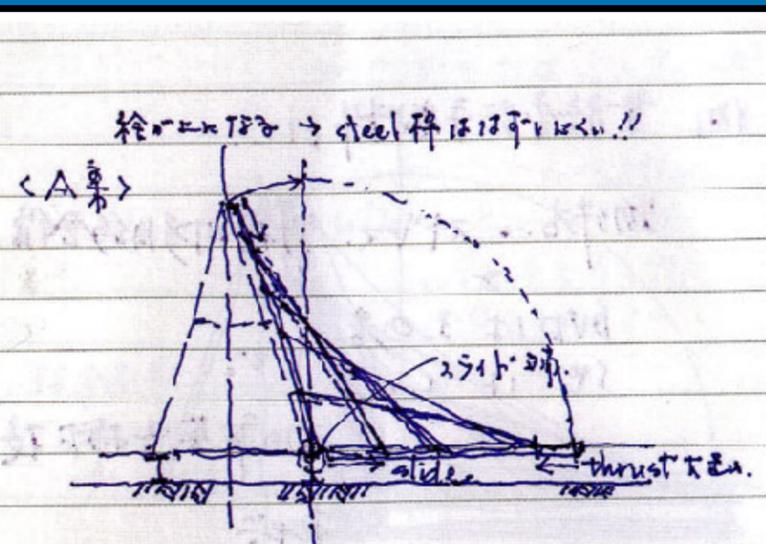
③-6(2004年10月~2005年4月)・所有権移転の締結・岡本敏子急逝



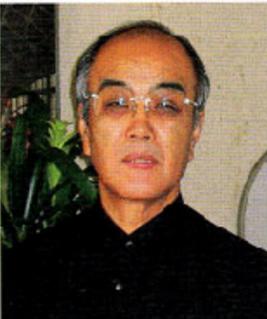
○ 作品の傷みは日増しに大きくなっていくし、いつまた姿を消してしまうかわからない。とにかく、すぐに走り出すしかなかった。こうして見込みも勝算もないまま、プロジェクトは船出することになった。もっとも、まず初めにやるべきことだけははっきりしていた。壁画を所有者から人手すること、そして壁画の物理的な特性を調査・解析することである。

○ 2004年春から本格的な交渉を始めた。しかし相手は文化の違うメキシコ人だ。ひと筋縄ではいかない。付かず離れず、押したり引いたりしながら、腰を据えて話し合いを続けた。正式に所有権移転の契約が締結できたのは、2005年3月のことだった。4月岡本敏子急逝

③-7(2005年)・壁画梱包の輸送計画

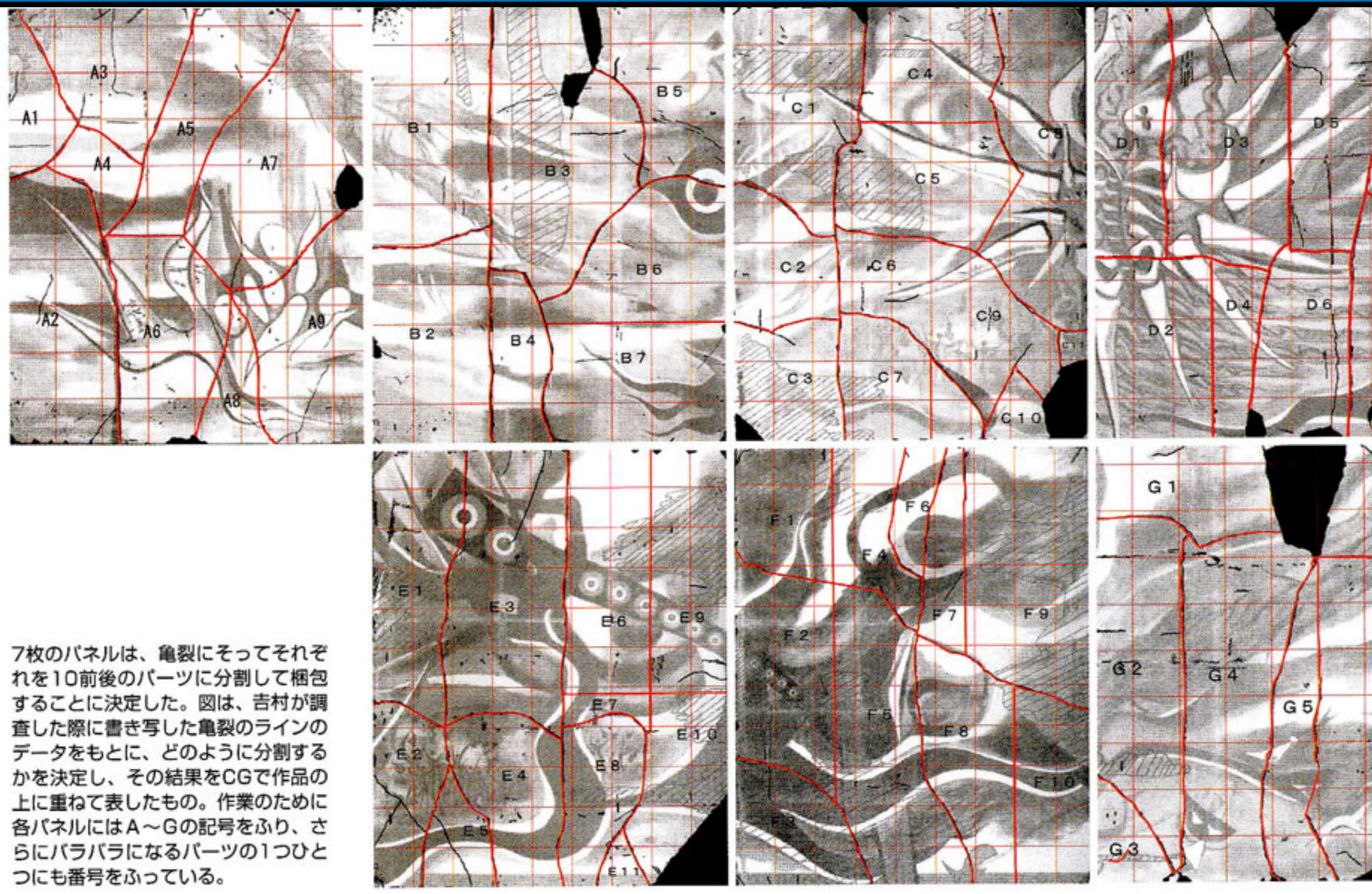


今回の再生プロジェクトのために、中田は何枚ものスケッチとメモを描いた。これは、全体に傷ついている壁画を、いかに損傷を与えずにうつ伏せに倒すかを検討した3案（最終的には、別の方法を採用）



中田 捷夫

なかた・かつお
 建築構造家・中田捷夫研究室代表。空間構造の権威・坪井勝に師事した建築構造の第一人者。大阪万博では「お祭り場」の設計に携わり、岡本太郎美術館建設時には巨大モニュメント「母の塔」の構造を担当。「明日の神話」再生プロジェクトのテクニカルスーパーバイザー。



○わずかな衝撃でも致命的なダメージを与えるに違いない。日本までの輸送に耐えるには、現場で作品を補強して現況のままフリーズする特殊な梱包と、振動を作品に伝えない特別な輸送方法が必要だ。これほど大きなものを相手に、しかもメキシコで、そんなことができるのか？ 百歩譲ってそのすべてを技術的に解決できたとしても、おそらく1年以上の準備期間と、軽く億を超えるコストが必要だろう。そんなプランを作ってみたところで意味がない。八方ふさがりだった。少なくとも作品を「**現状のまま傷めずに運ぶ**」という美術界の常識には、まったくリアリティがなかった。

③-7(2004年)・壁画の解体・移送



○対象の物理的な条件がわからないまま修復計画を立てることはできない。そこで、**2004年4月に絵画修復家の吉村絵美留(えみいる)が現地**に赴き、作品に対する詳細な**記録・調査**を行った。さらに彼は、壁画の破片を持ち帰り、研究機関に分析を依頼した。壁材や絵の具など、使用材料の組成と化学的な特性がわかったことで、**修復に必要な条件**が明らかになってきた。

○吉村さんは日本を代表する修復家である。なにより太郎の作品を熟知している。川崎に岡本太郎美術館ができる時、太郎作品の修復を一手に引き受けたのが彼だったからだ。敏子も全幅の信頼を寄せていた。彼しかいない。そう考えて、当初から吉村さんにはプロジェクトの中核メンバーとして参画してもらった。どうこうやって運ぶのか？メキシコ側との交渉が山場を迎え、**壁画の取得が現実味を帯びてきた2004年秋**から、プロジェクトの本格的な検討に入った。

④-1(2005年)・修復の実際・修復家・吉村絵美が語る

7月16日・愛媛県東温市の作業場に壁画搬入

修復家・吉村絵美留が語る



よしむら・えみいる
絵画修復家。高校卒業後、哲学者・谷川徹三、修復家・黒江光彦両氏に師事。
明治記念絵画館の作品や、東京国立近代美術館収蔵の太平洋戦争画などの修復を経て、'73年修復家として独立。「絵美留」は本名である。

○『明日の神話』の修復を行ったのは吉村絵美留。これまで岡本太郎の絵の修復を120点以上も手掛けている修復家だ。太郎の絵を知り尽くした男は、37年間眠っていた幻の大作をどのようにして蘇らせたのか。



再生プロジェクト修復チーム
左から吉村絵美留・上条法子・村木瑠子・石井匠
・山田樹仁

○作品は最悪の状態・・・メキシコで初めて『明日の神話』を見た時、吉村さんはどう思われましたか。修復家というものは、絵の傷みが激しければ激しいほど、闘志が湧いてくるものなんです。しかし、現地にあった『明日の神話』は、あまりにも欠損部が多くて、汚れ方も激しい。ファイトが湧くなんていう次元を超えていました。調査した後、報告書を作成したのですが、その冒頭にはこう書きました。「作品は最悪の状態である」と。

④-2(2005年)・壁画の修復作業・再生プロジェクト



ガラスステージに並べたパーツをどのような順序、仕上げ方で接合していくか確認し、検討していく



アクリルガラスで裏面補強したことにより、亀裂の跡などをそのまま見ることができる。 d15



エポキシ樹脂を流し込む作業



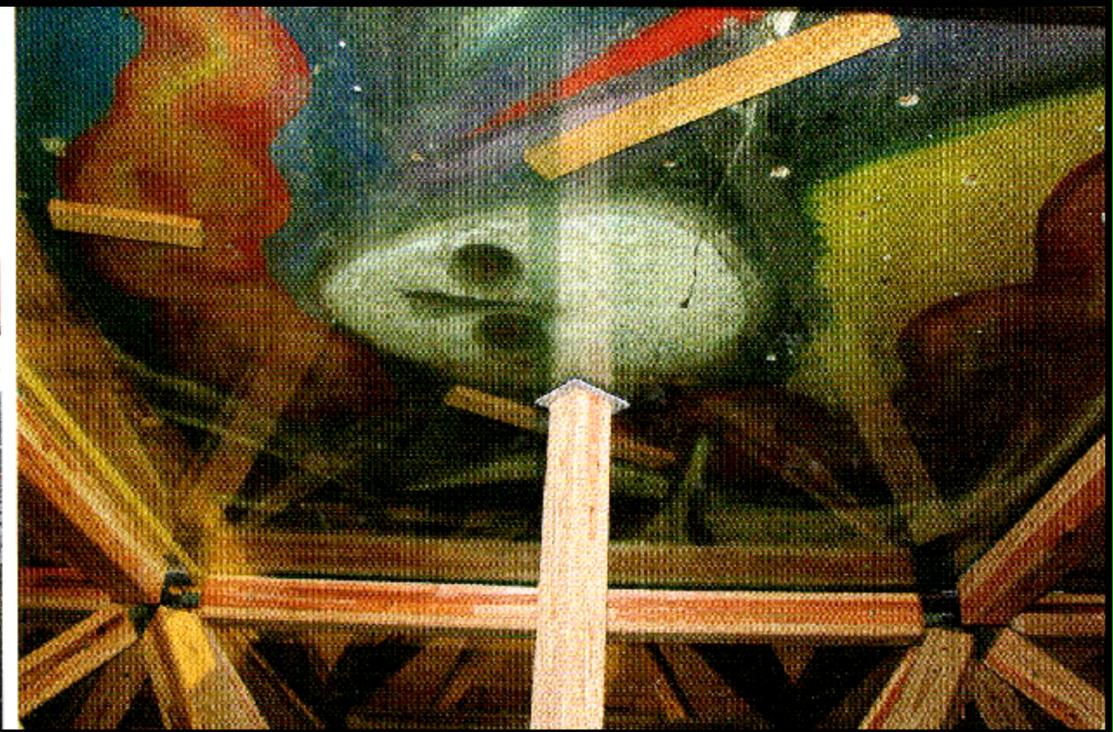
吊し作業

○エポキシ樹脂の流し込み作業は、想像以上に大がかりなものだった。以前から、現場は絵を修復しているとは思えないような風景だったが、その度合いがさらに強まり、まるで工事現場のごとき雰囲気となった。絵の横には、高さ5メートルのタワーを設置。この上からアクリルガラスの穴まで透明な塩ビの管が延びている。この管でセメントを流し込むようにして、エポキシ樹脂を注入するのだ。スポットクーラーで冷やしながらか送り込み、エポキシ樹脂の硬化時間を遅らせて、空間の隅々にまで行き渡らせていく。

④-3(2005年)・レリーフ接合~欠損部製作接合



ガラスステージの下から、どくろのレリーフ部分を見上げて。ところどころ挟み込まれているのは、レリーフ分の高さの空間を確保するためのスペーサーである、棒状のヒノキ材。



○ まず硬質シリコンを敷くのはどうかと考えるて、シミュレーションしてみると軟らか過ぎる。いろいろ試した結果、固さも柔軟性もヒノキが最適ということがわかりました。そこで、棒状のヒノキを敷き詰めて、作品を持ち上げてから接着作業をしました。

○ パーツ接着で最大の難問となったのは、中央の白い骨の部分でした。合成ゴムで作られたレリーフで、厚さ2センチほども飛び出しています。これでは画面がガラス面と密着するわけがない。そこで、絵の支えになるものをガラス上に敷いて、4センチほど上げてから作業を行うことにしました。

④-4(2005年)・壁画の修復に適した「実体顕微鏡」が大活躍

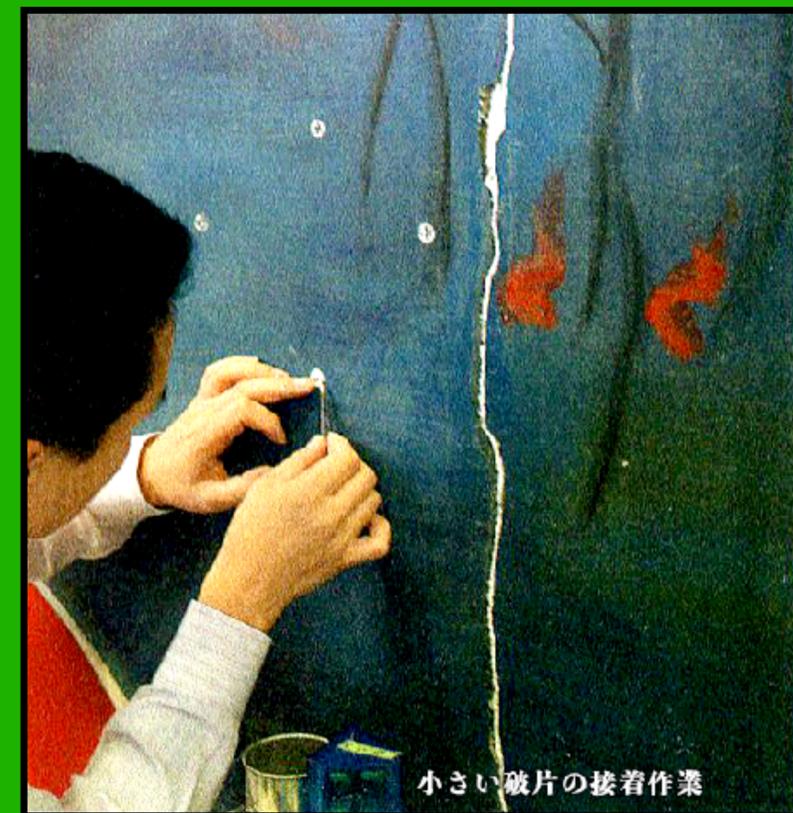
○練習で腕をあげた修復スタッフは、いよいよ補彩に取り組むことになった。大きな欠損を直す場合、**その周囲に存在する小さいところから直していくのが基本である**。そうすると、全体の構成がよくわかり、大きな欠損部がどのような色合いなのか、はっきり見えてくる。その道に、大きな部分から直していくと、小さな白い剥落部も全部目に入り、未修正の周囲の色が本来とは違う色に見えてしまう。人間の目というのは不思議なもので、画家が線や形、色彩を工夫して見事な遠近法で描いても、**画面にひとつ小さな欠損があっただけで、平面ということ意識してしまう**。ほんのちょっとしたことで、まるで立体感を感じなくなってしまうのである。ところが、小さな欠損部にぴたっと合った色を入れるだけで、印象はがらっと変わって遠近感が出てくる。描かれたのが人間の顔ならば、わずか1カ所直しただけで、急に顔がにこやかに見えるぐらいに変化することもあるほどだ。周囲の色と合わせるということは、絵の修復上、非常に重要な作業なのである。



実体顕微鏡の利用

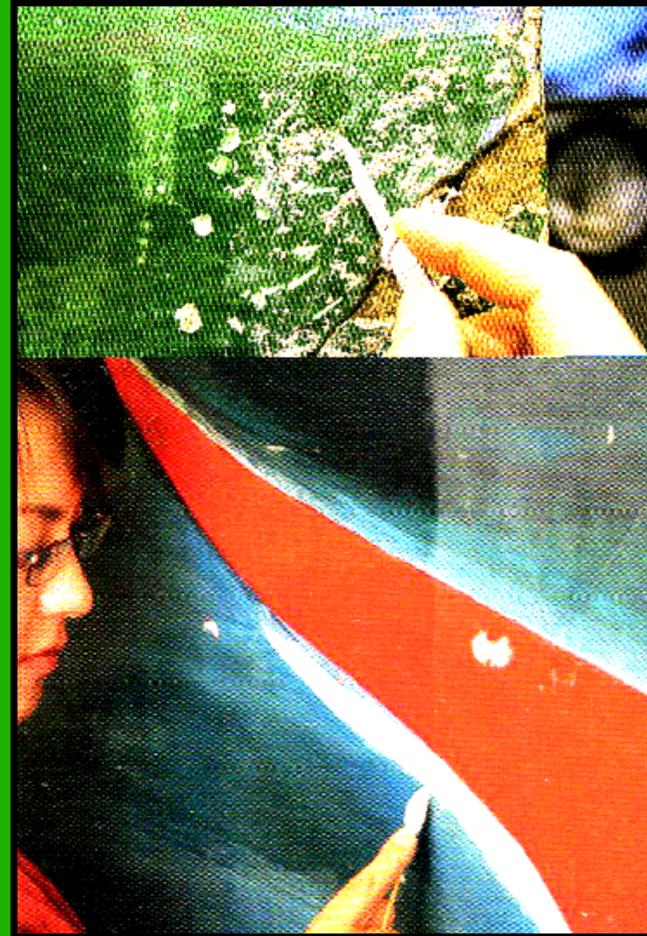
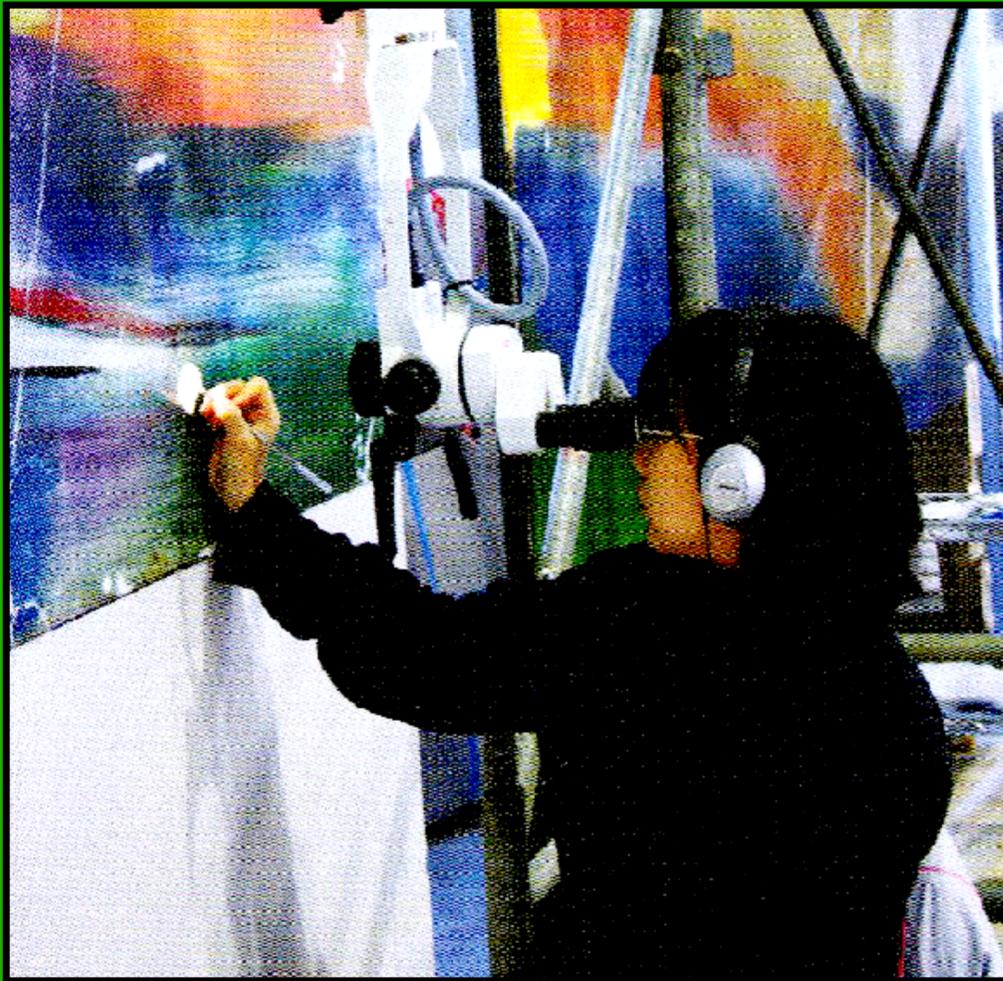


接着作業



小さい破片の接着作業

④-4(2005年)・画面の洗浄



○ ○洗浄で活躍した「超純水」・・・絵の立ち上げ後、どのような作業を行ったのでしょうか。画面がとにかく汚れていますから、まずきれいに洗浄しないといけません。ここで問題となったのが、太郎さんがアクリル絵の具で描いていることです。溶剤テストの結果、どのような弱い溶剤を使っても、絵の具自体を溶かすことがわかりました。そうなる、もう水しか使えません。

○ 『明日の神話』は建築途中のスーパーマーケットの空いている敷地で描かれている。下は土だから、何日か留守にしていると、土ぼこりが舞い上がって画面にのったはずだ。太郎さんはどうやら、この汚れを払わないで、そのまま描いている。というのも、絵の具の中に土ぼこりが随分見られるのだ。洗浄時に、これを取り去るわけにはいかない。土ぼこりとはいえ、絵の具が混ざっているのである。

④-5(2005年)・レリーフ復元

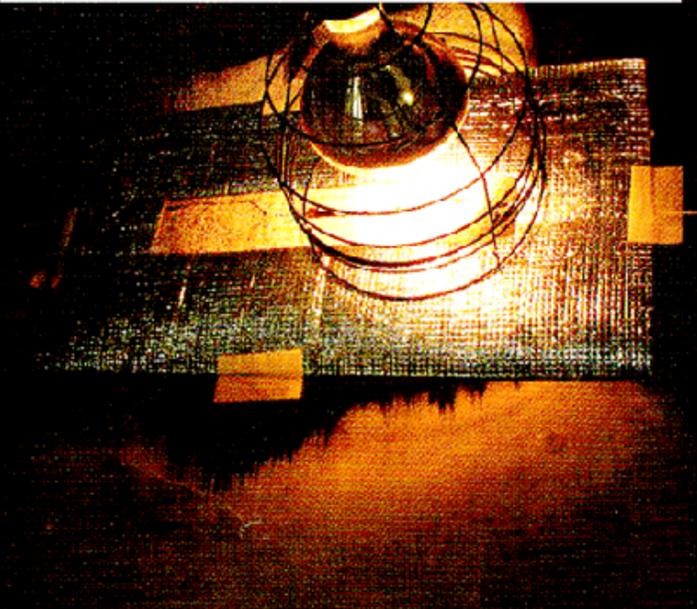


レリーフのへこんでいた傷を、元の状態に引っ張ってメスで成形する。中が空洞になった部分には、マイクロバルーンを充填材として入れた。表面は質感を出すために、細かなでこぼこを丹念に再現する。

レリーフ復元



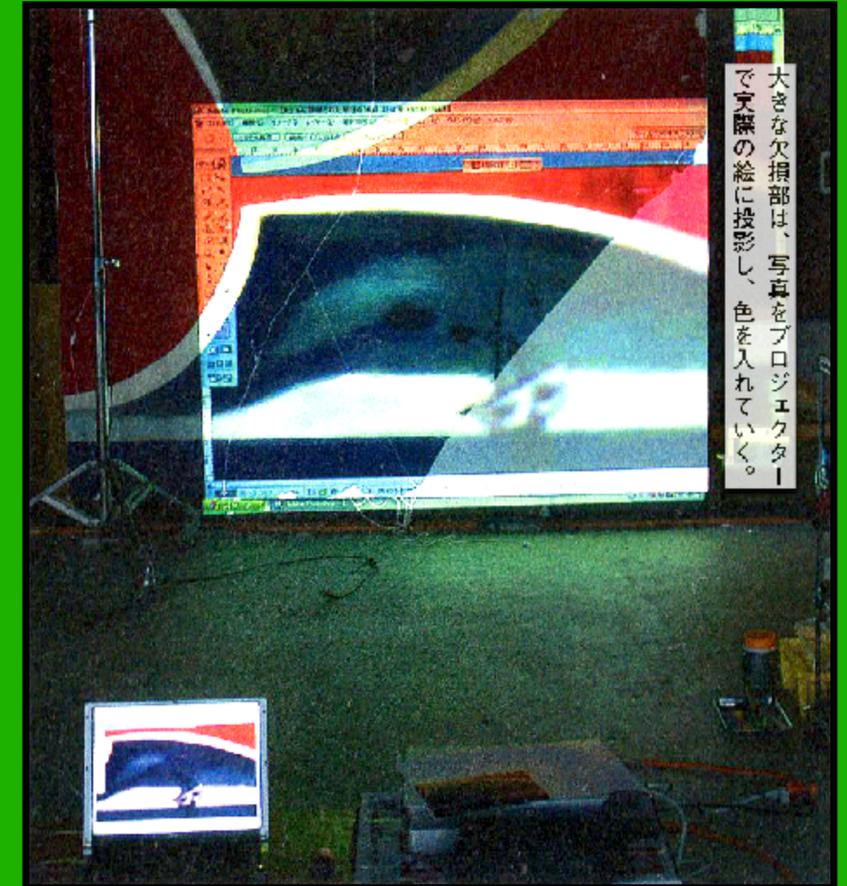
右ノどくろのレリーフを赤外線ランプで熱を加えて温めて、成形しやすくする。65度で約10分ほど温めると、適度な柔らかさになる。左ノ浮き上がったレリーフのすき間からファイバースコープを入れて中をのぞく。すき間にゴミなどが入っていないか確認するため。



○. レリーフ部分の傷み具合はどうでしたか・・・ひどく損傷していましたね。どくろ部分のはがれかかったり、無残なへこみもあって。どくろには赤外線ライトで熱を加えて、柔らかくしてから接着しました。へこみ部分も同様に柔らかくしたのち、圧搾空気を送り込むなどして元に戻しました。

○ 困難を極めた補彩・・・小パーツ接着後の作業は？
いよいよ充填部の補彩です。人工太陽灯で照らし、人間の目が色を最も正しく識別できる、午前11時頃の太陽光に近い光のもとで行いました。まず水彩でかなりの部分まで補彩して樹脂を塗ります。

④-6(2005年)・補彩作業



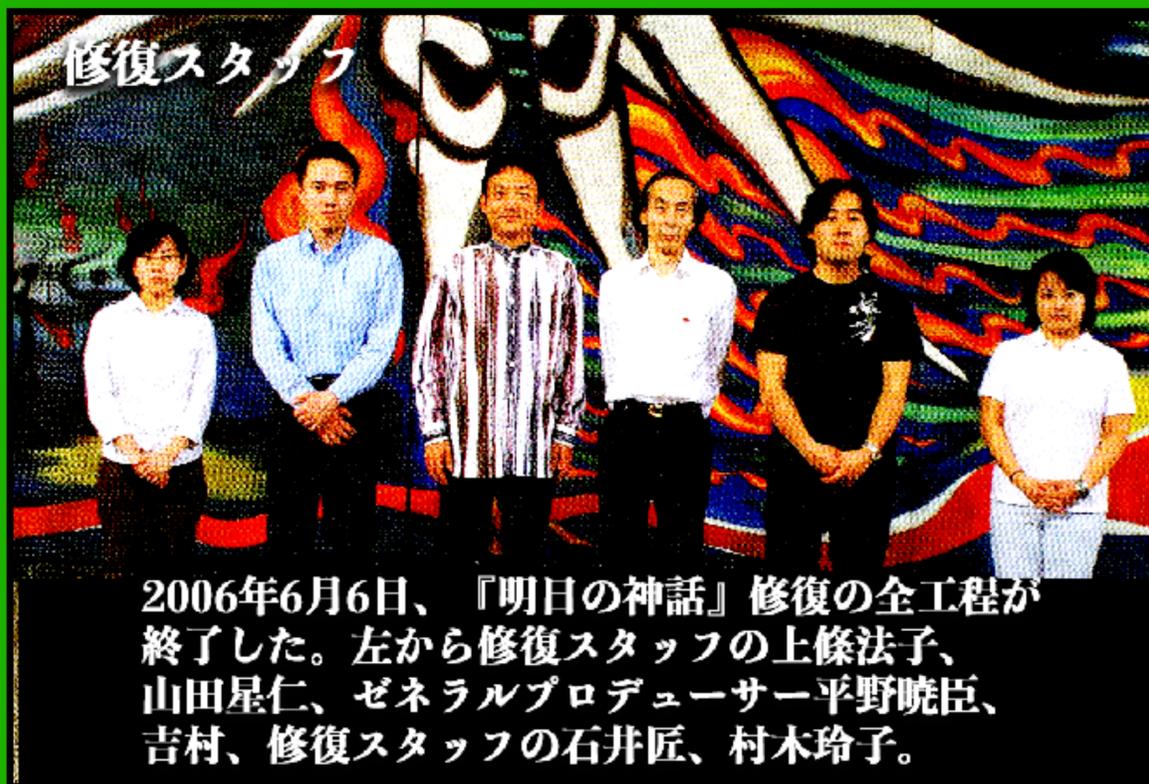
○色を合わせるのが大変そうですね。一見、単色のように見えても、じつはいろいろな色が微妙に重なり合っています。パレット上で、完璧に合わせた色を作るのはまず不可能です。このため、いったん塗ったところに、たとえば赤がやや足りないと思ったら、赤の絵の具を小さな点で打っていきます。ルーペでよく見たら修正がわかりますが、30cm離れたら気づかない。印刷の手法と同じです。

○補彩が格別難しかった部分がありますか。大きな欠損部です。なかでも右下の船はマストしか残っていなかった。ここは資料を元にして、新たに描くしかありません。形状で参考にしたのは、ホテルに飾られていた時に撮影された1枚の写真です。これをコンピュータ上で正対した形状に直して、プロジェクターで作品に投影し、鉛筆で輪郭をなぞりました。しかし、これだけでは色がぼやけてわからない。

④-7(2005年)・画面コーティング



コーティング作業

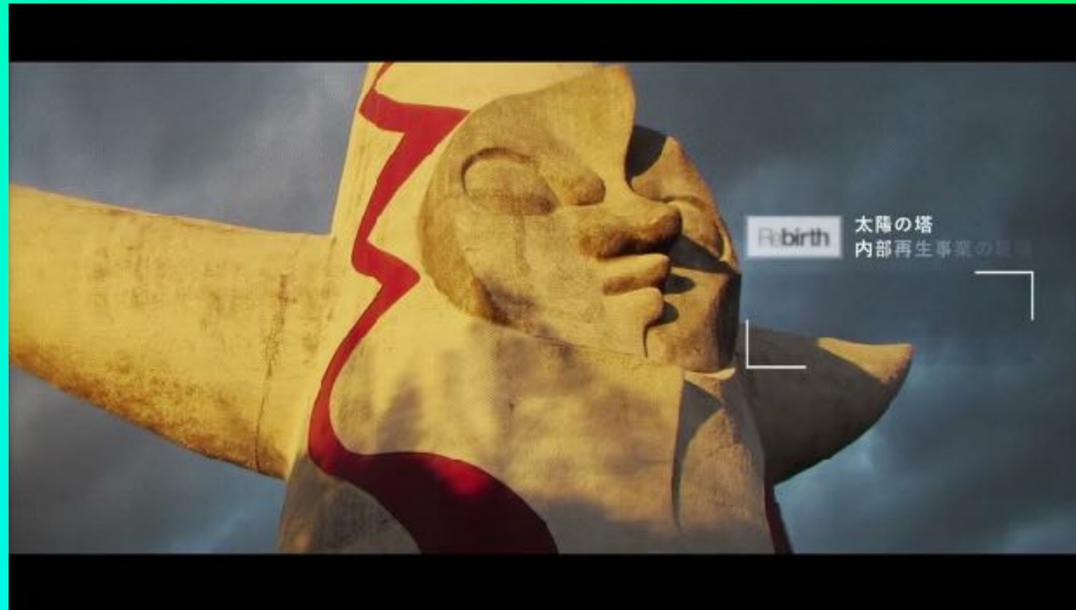


2006年6月6日、『明日の神話』修復の全工程が終了した。左から修復スタッフの上條法子、山田星仁、ゼネラルプロデューサー平野暁臣、吉村、修復スタッフの石井匠、村木玲子。

○ 修復を終えた感想を・・・『明日の神話』には、向き合っているだけで気分が明るくなる不思議な魅力があります。そのため、修復は難しい一方、じつに楽しかった。今回の仕事は、私の修復家人生の集大成になりました。

○ 補彩した面積は？ 7枚に分割されたうち、多いものでは1枚の5分の1ほどを補彩しました。資料がある程度あったので、最終的に9割くらいは正しい色を入れられたと思います。心残りは、最後に敏子さんにお見せして、ご確認いただけなかったことです。補彩が最後の作業ですか。いえ、補彩が終わったら、最後に保護膜をコーティングします。今回はコンタクトレンズにも使われるアルコンという樹脂を塗りました。無色で透明度が高く、紫外線にも強いというのが選んだ理由です。ほかの絵画も同じなのですが、全体の修復は50年持たせることを目標に行いました。ただし、補彩部分については20～30年後に見直さなくてはなりません。

芸術も建築も “闘いだ” ～岡本太郎と丹下健三～ (2008)



YOUTUBE



○今日のテーマ「太郎はなぜ「明日の神話」を描いたのか。」

○今日のテーマはいかがでしたか。

○次回のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しください。